
君がくれた宝物

癒佐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がくれた宝物

【Nコード】

N1950F

【作者名】

癒佐

【あらすじ】

いくつもの不運が重なり人を信じることを忘れてしまった青年。それを決して他人には明かそうとしない。「信じれば裏切られる、信じなければ裏切られない」だが、そんな彼を信頼している人間も少なくはなかった。未来の定まらぬ若者だからこそそのヒューマンドラマを描いてみた・・・つもりの物語。

プロローグ（前書き）

初めての作品ということなので読みにくいところなどがたくさんあると思いますので、遠慮なくご指摘ください。><

悲劇っぽい雰囲気なのにコメディーなのは気にしないで下さい。

プロローグ

セミの鳴き声もうるさくなってきた8月ごろ、俺は家の近くにある公園の木陰に腰を下ろし手に持っていた缶を口に当てて傾ける。

いよいよ昼時という一番暑い時間帯に来てしまったことに多少なり後悔をしたが、まあ気にすることも無いと忘れることにした。何より夏は暑いのがいいのであって、冷夏などというつまらないものになってしまっってはつまらない。もっとも、暑い夏が嫌いだという人も少なくはない。

「やっぱり、夏は暑いほうがいいよな」

誰に言うでもなく独り呟く。

缶の中身が空になったのに気がつくのと、近くにあるゴミ箱に向けて放り投げる。もちろん、野球など遊び程度でしか経験したことのない俺のコントロールが良い筈もなく、ゴミ箱とはぜんぜん違うところに落下した。

急がば回れ、自分の行為に苦笑しつつ立ち上がりゴミ箱よりはなれたところに転がった缶を拾い上げてそのままゴミ箱に入れる。

少し日向に出ただけなのに木陰に居るときと比べてかなり暑く感じられた。今日の最高気温は35 を超えると今朝の天気予報で言っていたのを思い出す。しかしこれは40 を超えているのではないかと思えるほどの暑さだ。

「ま、寒いのはいいけどな」

先ほどの場所に戻り再び腰を下ろす。

他人から見たらまったく不毛な時間をすごしているように見えるかもしれない。いや、俺自身も実はそう思っているだろう。

今がいくら夏休みと云えど、受験生という重い看板を背負った学生たちには平日よりもつらい時期なのだ。それこそ、1分1秒をも惜しまなければいけない覚悟で過ごしている連中もいるだろうし、その1人である俺もその覚悟が必要だろう。

「わかってるんだよ、わかっちゃいるけどさ…」

休みに入ってから時間はばらばらだったが、この場所に来なかった日はない。もちろん学校が休みに入る前から暇な時間を見つけてはここにきていた。そして何もせず、ただ公園の中央部にある噴水を見つめながら1時間ほどそこに座り込むことを繰り返していた。何度かその姿を友人に見つかりいろいろなことを言われたが、特に気にも留めずやめることはなかった。

約束は、守るためにあるんですよ

いつか聞いた事のあるフレーズが頭の中でよみがえる。この先に何か続いていくつかの言葉もあった木がするけど、今は思い出せない。それでも、この言葉だけは今でもハッキリと覚えている。

遠い昔のように感じる懐かしい言葉。もう忘れてしまったかもしれない声。目を瞑ってもぼやけてしか浮かび上がらない姿。かつては当たり前のようにあったものが今では夢から覚めてしまったようになくなりかけていた。

まぶたを閉じ後ろに立っている木に背中をあずけるように寄りかかる。

そして、二度と繰り返すことのない日々を頭の中で考えていく。

俺が俺であることを教えてくれた人と過ごした日々

それはとてもとても短い時間であり暖かい時間であって今までに中で大切な時間だった。

2年という月日をさかのぼり、その日その日の出来事をおぼろげな記憶から呼び起こす。

この世で一番大切なものと出逢ったそのときのことを

第一章：始まり 「日常」

「おい、聞いてるのか怜？」

「あ…ああ、それで？」

6月の後半、梅雨真つ盛りのこの時期でジメジメした空気が充満している教室で俺たちは机を挟み向かい合う形で話をしていた。

もともと、俺は窓の外をぼんやりと眺めながら聞いていたので話の内容など半分も覚えてはいない。

「それでよ、志保しほったら『慎二しんじくんは運動しかできないんだから体調だけは崩さないようにしないとダメだよ』なんて言ってくるんだぜ？風邪で寝込んでる彼氏に向かってそれはないよなあ？」

「まあ、御神みかみさんらしくていいんじゃないか？一応心配されてんだし文句いっつなよ」

「そうだけだよー、それじゃあまるで俺が筋肉馬鹿みたいじゃないか」

違うのか？と言いかけてやめる。これ以上話を長くする必要もないだろうし、変に挑発的なことを言っただけで口論になるのはもっとめんどくさい。

何より、俺は自分のことで手一杯の状況なのに他人の事になどかまっている暇はなかった。

「何でもいいだろ？それよりこれ以上雨が強くなる前に俺は帰らせてもらっつよ」

慎二の答えも待たずに、机の横にかけてあった鞆を持ち上げると中に入っている折り畳み傘を取り出す。そして、目の前で納得のいかなそうな表情をしている男に差し出す。

「ほら、お前今日傘持ってきてないっていつてたたる?」

「お、サンキュー! 助かるぜ」

傘を渡すと立ち上がり廊下に出ようと歩き出す。

教室のドアに手をかけようとしたら、突然ドアが開いた。もちろんあけたのは俺ではなく、ドアがあった場所の向こう側に居る人の仕業だ。

「あ! 朝倉^{あさくら}くん朝倉くん、慎二くんはもうもう帰っちゃったかな?」
ドアを開けたのはどうやら先ほど話題にもなっていた御神さんだっ
た。

俺の顔を一瞬だけ見て、質問をしながら教室の中をきよるきよる見渡している。おそらく慎二と帰る約束でもしているのだろう。

「いや、慎二ならそこにいるよ」

振り返り自分の席の斜め前にある机を指差す。慎二は鞆の中の物を机の引き出しに入れていた。きっと明日授業で使う教科書などが濡れないように学校においていく作戦なのだろうがそれでは家で勉強できないと考えは無いらしい。

(いつも課題をサボっているのだから当然と言えば当然なのか・・・)

「あ、いたいた！朝倉君ありがとね！慎二くん帰ろうよ」

お礼を言いつつも顔は慎二の方を向いていた。特に言うことの無い俺はそのまま開きっぱなしの扉を通り廊下に出た。後ろからは慎二と御神さんの楽しそうな話し声が聞こえていた。

階段を下りて下駄箱へと向かう。靴を履き替え傘立てから自分の傘を取り出し玄関の扉をくぐる。さっきまではバケツをひっくり返したような勢いで降っていた雨だが、今では若干雨脚が弱まっている。傘を差すと地面にできた水溜りに入らないように気をつけながら校門を出た。

「あら！怜君こんな雨の日でもご苦労様ね」

「どうも。雨だろうと雪だろうと俺は来ますよ、玲子先生」

「ふふふ、美咲ちゃんがお待ちかねよ」

「そうですか、今日もありがとうございます」

「いえいえ、これも私のお仕事ですからね」

学校からの帰りに保育園へと寄り道をする。もちろん、暇つぶしなどではない。妹を迎えに来ているのだ。それで、今話していたのは保育園で妹の世話をしてくれている人だ。始めのうちは苗字で呼んでいたのだけれど、本人曰く「女の子を呼ぶときは苗字より名前だからね！な・ま・え！」といわれて以来仕方なく名前で呼ぶことに

した。理由を尋ねたらその方が可愛いからなどと言っていた。先生という呼び名が似合わない子供のような人だ。

「あー、さとにいー！おそいおそいー！」

トタトタトタ、バンッ！

玲子先生に連れられ教室をでた美咲は入り口のところに立っている俺を見つけると、廊下を文字道理トタトタと走ってきて足に抱きついてきた。

「わるいな、世界平和のために悪の手先と戦ってたから遅れちゃった」

「あくのてさきー？それってわるいひとたちなのー？つよかったのー？」

「ああ、激強だ。だが俺の足元にも及ばないけどな」

「うー！さとにいっつよいつよーい！」

もちろん嘘に決まっている。だが、このくらいの年齢の子供はすぐに騙されてくれるので少しばかり調子に乗ってしまふ。悪いことをしているつもりではないので特に気にも留めないが、いつか自分の調子に乗った嘘がきっかけで大変な事態に陥ったことを思い出したので、今日はこの辺にしておく。

「まあ、その話はまた今度な」

「いんどいんどー！」

足に抱きつきながらキャツキャと喜んでいる美咲を見ていると少しばかり気が楽になった。

「それでは玲子先生、明日もお願いします」

「大船に乗ったつもりで預けちゃってね」

めちゃくちゃ不安だが、今まで何も問題を起こしていないので大丈夫だと思いたい。

足に張り付いていた美咲をはがして片手を取る。そして反対の手で傘を持ち美咲が雨で濡れないように気を使いながら保育園を出た。

玲子先生が見えなくなるまで美咲は後ろに向かって手を振り続けた。

「ただいま」

「ただいまあー！」

二人仲良く家の中に入ると美咲は靴を脱ぐとすぐさまリビングのほうへ走っていった。俺は傘をしまってから少し濡れてしまった鞆の水を払ってからあがる。廊下につっすらと残っている美咲の足跡をたどりながら俺もリビングに入る。

「よう、怜。今日も美咲の迎えご苦労さん」

「伊月姉帰ってたんなら、姉さんが迎えに行ってくればよかった

のこ」

「なんだあ？弟分のくせにこのあたしに意見しようってのかい？」

「はあ、めんどくせえな。そんなんだから彼氏ができねえんだよ・
」

「何か言ったか？」

「いや、何も？」

リビングでソファアに豪快に座りながらテレビを見ている伊月姉さん。その横には美咲が無邪気な顔で一緒になってテレビを見ている。一見するとまるで親子のようにも見えるのだが真正正銘の姉妹だ。伊月姉は今年で二十歳になり俺は今年で十六歳、美咲は五歳だ。俺と伊月姉はあまり歳は離れていないが美咲だけはかなり差がある。知らない人が伊月姉と美咲の組み合わせを見たら間違いないと親子と間違えるだろう。

「そつえば、怜お前ちゃんと病院に寄ったのか？」

「ん？ああ、忘れてた」

「おいおい、もし万が一の事があるだろ。今からでも遅くないから行って来いよ」

「今からかよ、しかも雨降ってんのに？」

窓の外に視線を向ける。さっきまでは辛うじて弱くなっていた雨脚も今では前以上の酷さになっていた。

「ほらほら、早くしないと間に合わなくなるよ？あたしは美咲の面倒と夕飯の支度はしとくからさ」

「さとにいー、はやくしないとダメだよー！」

「く、美咲まで言うか…」

最近ようやく伊月姉に対抗できるようになったと思っていたのだが、今度は美咲までもが姉さんの真似をして俺を攻めるようになってきている。流石に小さな子供に対して悪態をつけるはずもなく、伊月姉の命令にしたがうしかなかった。

家をでて歩く事40分ほどで目的地についた。ここ一帯では一番大きな総合病院と言うこともあり、雨の日のこの時間でも出入りする人は決して少ない方では無かった。

自動ドアを通り受付をスルーして廊下の奥の方にあるエレベーターに乗り込む。他に乗っている人はいなく、途中から乗ってくる人も居なかつたのでスムーズに目的の階につくことができた。

26階

ここの病院は30階建になっていて、通常入院者用の部屋は10〜25階にある。そして俺が今いる所は集中治療室だ。ここは入院患者の家族など許可のある者でないと入れない場所になっている。エレベーターを出て目の前にある扉を開ける。扉の外側には“関係者以外立ち入り禁止”と書かれた看板があつたが無視して進む。何も無い廊下を少し進んだところに受付が見えてきた。

「あら？怜君じゃない、今日は遅かったのね」

「どうも、雨が降っていたので遅くなってしまいました」

「今日はもう来ないかと思ってたわよ」

「そのつもりだったんですけどね、姉が行けっつるさくて」

「相変わらずお姉さんには頭が上がらないのね？」

「そついう言い方はやめてくださいよ、新城さん^{しんじょう}」

「あら、「ごめんなさいね」

俺の姿を見るなり、受付に居た看護婦さんが話しかけてきた。俺がここに来るようになってから毎日顔をあわせるようになっていたので、少し前くらいからはいろいろと話もできるようになっていた。

「それじゃ、行きましようか」

「はい。お願いします」

新城さんが受付に居たほかの看護婦さんたちに一言二言話してから廊下へ出てくる。一般の病室なら受付などに言わなくても見舞い客は面会時間内なら自由に出入りできるのだがここは違う。普通よりも面会時間は短くされていて許可の出されている者でも、その階にある受付にいき病院のスタッフと同行しないといけないのだ。

しばらく廊下を歩いたところでひとつの扉の前に立つ。

「何度も来ているからわかるでしょうけど、携帯電話などの電子機器の電源は切つてあるわよね？」

「はい、もちろんです」

「中に入ったら決して大きな声や音を出してはいけません。また勝手に医療関係の機械もいじったり・・・」

「わかってますって、今日でそれを聞くの何回目だとおもってるんですか？」

「一応説明する規則になっているのよ、ごめんなさいね」

俺が来るときに同行してくれるスタッフはほとんど新城さんだったので俺はこの無駄な説明はいらないと考えていたが、スタッフ側に見れば必ず行わないといけないことなのだろう。

「それでは中へどうぞお入りください」

新城さんが一際頑丈そうな扉を開ける。中に入ると三畳ほどのスペースの空間で、入り口の向かい側の壁には大きなガラスがありその隣にはもうひとつの扉があった。

「まだ、変化は見られません。いつ目を覚ますかはわかりません。もしかしたらこのまま・・・」

「変化が無いことを確認しに来ただけですから、大丈夫ですよ」

ガラスの向こう側には真っ白い部屋があり、中にはベッドに寝かされた一人の女の人に何本もの線が刺さっていて、顔には呼吸をさせ

るための機械が取り付けてある。そして患者の名前が書いてあるネームプレートには

あさひくみ ひろみ
“朝倉裕美”

と、書かれている。一言で言うと、俺の母親だ。

しばらくガラス越しに母親の様子を見てから部屋を出る。新城さんはまだ居てもいいと言ってくれたが、これ以上見ても何も無いと言つて今来た道を戻る。

「それじゃ、俺はもう帰ります。お仕事がんばってくださいね」

受付が見えてきたところで隣に居た新城さんに挨拶をする。新城さんは少し困った顔をした後にいつものような笑顔に戻ってから受付の中に戻っていった。

エレベーターを呼ぼうとボタンを押そうとしたときだった。突然、エレベーターの扉が開き中から中年の男女が勢い良く出てきた。いきなりすることに驚いて後ろに倒れて尻餅をついてしまったが、その人たちは俺のことなんか視界に入っていないかのように気に留めることも無く受付のほうへ急いで向かっていった。

「なんなんだ、あれは？」

少しの間啞然としながら地面に座っていたのでエレベーターが下りていってしまったことに気がつかなかった。

しばらくして座った状態でボタンを押してから立ち上がるうと足元を見ると、見慣れないペンダントが落ちているのに気がついた。それを拾い目の高さまで持ち上げて観察する。十円玉くらいの大きさの楕円形の金色の金属枠に輝石のようなものが等間隔に埋め込まれ

ていて、中央部分にはガラスのようなものが埋め込まれていた。どこぞの屋台で売っているようなものようだ。

「さっきのひとたちのか？」

後ろを向いて受付に引き返そうと扉に手をかけようとしたとき、エレベーターがきてしまった。ここで乗り過ごすともた何分も待たされてしまうと思った俺は、明日また来たときに受付の人に渡せばいいと考えてそのペンダントをポケットにしまい込み、エレベーターに乗り込んだ。

その選択が俺の人生を左右することになるとは当時の俺は夢にも思っていなかった。

そう、これが全ての始まりだったのかもしれない

第一章：始まり 「日常2」

ピピピッーピピピッーピピピッー

朝になった事を告げる目覚ましの音を聞いて身体を起こす。朝の目覚めは良いほうなので二度寝の心配は無い。

5：30

デジタル時計に表示されている時間はいつもどおりの起床時間、本当は後一時間くらいは寝ていてもいいのだが最近の朝は洗濯物を干したり朝ご飯とお弁当を作ったりしなければいけないようになってしまったのでこの時間に行っている。

二階の自室から降りて一階の洗面所に行き顔を洗う。そして洗濯機が回っているのと残り時間を確認してから再び部屋に戻る。

すぐに着替えを済ますとエプロンをつけて台所に立ち、適当に朝ご飯の準備を始める。最近始めたばかりの料理だったけど、人並みのものは作れるようになった・・・はずだ。少なくとも身内の味覚が狂っていないければそれなりの味だろう。

「さて、何を作るかだが」

材料を確認しようとして冷蔵庫を開けると、中には土鍋が丸々一個入っているだけで他にめぼしいものは見当たらない。扉の内側の卵いれを覗くが一昨日買ったばかりだったのに1つも残っていなかった。

「冷蔵庫に土鍋で・・・」

そこで昨日の夕食を思い出す。

俺が病院に行っている間に姉さんと美咲が二人で作ったと自慢していた鍋。家についた頃にはいつでも食べれるようにセッティングされていた。何の疑いもなく自分の席にすわり目の前で湯気を上げながらふたを揺らす鍋に多少なりともわくわくしていた。

普段の食事係は俺の仕事だった。なので俺がいないときはインスタント食品が出前と相場が決まっていたので、自分以外の人間が作る食事に不覚にも期待してしまったのだ。

それが悲劇の幕開けだった

俺『なあ、この鍋の中身は何があるんだ？』

姉『んー？それは食べてからのお楽しみで』

俺『お楽しみって、物によってはポン酢とかいるだろ？』

姉『そう言われてもねえ。使いたいならポン酢なり醤油なりソースなり使えばいいじゃん』

俺『なんか・・・いやな予感がするんだが』

妹『みさきもー！みさきもねー、いつきねーねといっしょにつくったんだよー！』

姉『そうだぞ！美咲とあたしの最高傑作なんだ！つべこべ言わず食べないとバチが当たるよ？』

俺『はあ、わかったよ。じゃあせめて鍋の名前だけ教えてくれよ？』

姉『仕方ないなー』

妹『さとにいーわがままー！』

俺『はいはい、で？何鍋なんだよ？』

俺の質問に対する答えを伊月姉と美咲が口をそろえて言う。

姉&妹『病み鍋』

まさかそう来るとは思わなかった、よく朝を迎えられたと思うよ、ホント。“閻鍋”ならまだ読める範囲だったが“病み鍋”って・・・、俺を殺すきかあいつらは。

名前を聞いて啞然としてる俺の目の前で蓋が開けられたときはまだ良かった。見た目は野菜がたくさん入ってる湯豆腐見たいな感じ（もちろん豆腐もあることにはあった）で、てつきり二人にいったい食わされたと思ってしまった、・・・お玉ですくっただし汁の色を見るまでは。

その後のことは俺の記憶からさっぱりと無くなっていた。気がついたら自室ですでに横になっていた。

そのときの鍋だったことを思い出し中身を確認することもせず、庭にある生ごみ処理機の中に流しいれる。もちろん目を瞑っての作業だ。たしかこの処理機は液体を入れても大丈夫だったハズだと自分に言い聞かせて、空になった鍋を流しに置く。

冷蔵庫の空具合を見るに、手当たり次第の材料を使ったようだった。

現代の日本人ならではの食品の無駄遣いとはまさにこのことだろう。しかし、今はそんなことよりも我が家には食料がないという事実だけが問題なのだ。かろうじて生き残っていたものは塩や胡椒、砂糖といった粉末系の調味料と醤油やソースなどくらいしかない。せめてパン一斤・・・いや一枚か、でもあれば美咲の分くらいにはなるだろうがそんなものが残されているはずもない。このままでは朝食どころか昼の弁当すら作れない。

「弱ったなあ・・・」

頭を掻きながら冷静に考える。

食料がない 料理ができない 食事ができない 食料があれば助かる 買いに行けばいい！

そうだ、材料がなければ買いに行けばいい。わざわざこんなことで悩むことなどなかったのだ。それを考えると、今の時代は便利だ。スーパーやコンビニは24時間毎日やっているところが多く、家の近くにも何件かあるはずだ。

つけていたエプロンをはずして椅子の背もたれにかけて玄関に向かう。そして、靴を履き鍵を開けてから扉を開く。

ゴン！

中途半端に開きかけた扉に何か当たり最後まで開かない。外には扉に当たるような障害物は置いていないはずだったので力加減ができなかったためかなり大きな音が響いた。

何事かと思ひ、中途半端に開いた扉の隙間から顔を出し外をうかがう。ソコには両手にコンビニのビニール袋を持って、しゃがみながら顔を抑える形で悶絶している男がいた。

「なに・・・してるんですか？」

何しているかなどは一目瞭然、勢いよく開いた扉が顔面に当たりその痛さに悶えているのだろう。俺がその質問を投げかけてからしばらく間が空き、男は若干赤く腫れている鼻をさすりながら立ち上がった。

「イタタ・・・前方不注意、いや参ったねこれは」

「あ、松村まじむらさんじゃないですか！どうしたんですか？」

「ああ怜くん！ホラこの通りさ」

衝撃ですれてしまった眼鏡をビニール袋を持ちながらの手で器用に戻すと、若干苦笑しつつ両手を顔の高さに上げてその袋を強調した。

「まさかとは思いますが・・・姉に？」

「まあね、君のお姉さんにはどうも頭が上がらないのが僕の欠点の一つだね」

たはは、と今にでも聞こえてきそうな感じの顔を見ていると多少の同情も否めない。松村さんは姉とは高校の同級生でいまでも連絡を取れる数少ない友達の一人だ。本人曰く、入学当時から姉とに逆らえないように調教？されていたらしく、卒業した今でも時々いいように使われていると言う。

その理由はきつと松村さんが温和な性格の持ち主で争いごとを好まないからであり、唯一家との距離が近い友人だからと言うことなのだろう。

「えと、それでその袋の中身は？」

「ああ、これかい？今朝の朝食用の菓子パンと昼用のお弁当だよ。コンビニで買ったやつだから味は保障しかねるけどね」

そういつて二つの袋を俺に差し出す。

きつと姉さんは食材を全て使ってしまったことに気づき自分が買いに行けばいいものの面倒くさがってこの人に押し付けたに違いない。

「あ、えと・・・ありがとうございます」

「ハハ、お礼には及ばないよ。ただ、今度からは外に人が居ないかを確認してからドアを開けて欲しいかな？」

「あはい、そうします」

それじゃ、と手を振りながら180度回転して帰っていく。

いつも姉に振り回されて可哀相に見えるのだが、実際は本人もそれを楽しんでいるようにも見えなくはない。悪い人ではないのだがM体質と言つか・・・伊月姉とは変な意味で相性もいいのかもしれない。

「あ、この分の代金払わなくてよかったのかな？」

両手に持っている袋の中身からして、それなりの金額はあるだろう。

（まあ、今度あったときに返せばいいか）

はきかけの靴を元に戻し、見事にパシられてくれた松村さんに感謝しつつ朝の準備へと戻った。

「お、怜じゃん！おっはよー！」

無言で教室にもかかわらず、開いたドアをくぐるなり挨拶を浴びせられる。しかも、教室の一番奥から慎二の奴が馬鹿デカイ声で言うものだから俺が来たことに教室の全員が気づき、それに習ってそれぞれに挨拶をしてくる。

「あ、朝倉くんおはよう」

「よー！朝倉、おっはー！」

「おはよう！あさくらあ」

「おはようございます、朝倉さん」

席に行くまでに何人者人間に挨拶をされる。そのたびに小さく『おはよう』とそっけなく返しながら自分の席に座る。そして鞆の中からいくつかのノートや教科書を取り出して机の中にしまい、鞆を横にかける。俺の席は一番端っこの位置にあり、左側には窓がある壁しかない。よって、右手で頬杖をつけば窓の外を見る感じになる。コレがいつもの俺スタイル。授業中だろうが休み時間だろうが、自分が“暇”だと思っっているときはずっとこの格好をしている。授業中もこの学校の教師はたいてい席の順番どおりに生徒を指名するので俺が一番最後なので当たらないときがほとんど、たまにあたりそうな気配がするときだけまじめに勉強しているふりを装う。休み時間、慎二が俺に話しかけてくるときと弁当を食べる以外はずっと同じ体制で居る。慎二以外の連中は俺にはあまり話しかけようとし

ない。

(ってか話しかけづらい雰囲気を作ってるんだろうな、俺)

少し前までは何人かのチャレンジャーが何かと話を振ってきたが、そのつど俺は素っ気無い対応しかなかった。嫌われたくしていたわけではなく、相手をする余裕がなかったからだ。そして、話しかけてきたやつらもその理由はどことなく知っているらしく、怒ることもなく少し曖昧な表情で去っていくのだった。

当たり前のようにそんな俺には憤り以外に友達と呼べるような人間は居なかった。

(中学まではそれなりに楽しかった学校が、今じゃただの暇な所ではないか)

特にすることもないので窓から外を何気なく見下ろしていた。

そこには、ほぼ毎日見ているせいでいい加減見飽きているいつもと何ら変わりのない風景が

「・・・？なんだアレ？」

いつもとは一つだけ違う場所があった。

窓から見えるのは校門。この時間帯になると遅刻間際の生徒が走ってくる姿がある。中には諦めているのかゆっくり歩いて来るやつもいる。そこまではいつもどおりの光景だ。

問題は校門の外の車道。普段は見掛けないような黒塗りの車が一台停車しており、そこから2人の人間が出てくる。視力は悪くない俺だが、この窓から校門まではかなりの距離があるので、それが誰であるかは判別できなかった。

（まあ、知らない人間の可能性のほうが遥かに高いか）

遅刻しそうな生徒達もその車に気を留めつつも、校門から教室までのラストスパートをかけるべく直ぐにその場から離れて行く。すると今度は学校の中から1人の教師が小走りに出て来た。

「あれは…担任の宮崎みやまきじゃないか？」

ボソリと呟くが、当たり前のようにその問いを答える人間は居なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1950f/>

君がくれた宝物

2010年10月16日02時09分発行